

実践報告：1 歳 6 か月児健診、3 歳児健診、5 歳児健診での保護者への関わり
—発達段階に合わせたことばかけ—

国際医療福祉大学 岩崎淳也

健診で発達上の問題を指摘された保護者は、「うちの子は発達が遅れているのだろうか」「子どもとどうやって関わればいいのか」等の不安な気持ちを抱えて言語聴覚士(ST)のもとを訪れます。そこで ST に最初に求められる役割は、保護者の不安を和らげることだと考えられます。一方的に発達の見立てについて説明をしても、頭に入ってきて来ない状況かもしれないので、まずはお子さんの普段の様子や心配な点について話を伺うなどしてコミュニケーションを取り、可能な限り保護者との信頼関係を築くことが大切です。

次に求められるのは、子どもとの関わり方やことばのかけ方について適切なアドバイスを送る役割です。ST に来るのはあくまでサポートであり、子どもを養育する中心的な存在は保護者です。子どもに発達の遅れや偏りがあっても、保護者が自信を持って子どもと関わり、前向きな気持ちで育児に取り組めるように支援することが重要です。しかし、定期的にお子さんや保護者とお会いすることができる病院での臨床と違い、時間的な制約のある健診や事後フォローでは、これはとても難しいことです。

より良いアドバイスを行うためのポイントとして、1)子どもの発達段階に合わせたアドバイス 2)日々の関わりに生かせるような、具体的で分かりやすい説明、の 2 点があると考えられます。例えば一般的に言われる「たくさんことばをかけてください」といったアドバイスでは、子どもにどんな言葉を、どのように話せばいいか分かりません。具体的なことばのかけ方について提案し、日々の子どもとの関りに生かせる内容であることが重要です。

子どもへの望ましいことばかけについて保護者に伝える際、「何を」「どんな言葉で」「どのように」話すか、といったように整理をすると分かりやすくなります。例えば 1 歳 6 か月健診で事後フォローになった児を例にとって考えてみましょう。

「何を」…子どもが注目していることについて

「どんな言葉で」…オノマトペを積極的に使いながら

「どのように」…子どもの行動や発話に合わせて言葉をかけましょう

これらの内容について文書を用いて説明した上で、実際に子どもと関わりながら解説し、さらに文書をお渡しして家で見返していただくことで、ST のアドバイスの内容が伝わりやすくなると考えられます。講習会では私が保護者にお渡ししている文書の例をお示ししながら、保護者へのことばかけの支援についてお話させていただきたいと思います。